

これまで早期診断による外科手術が必要と考えられてきた胃石イレウスであるが、コーラ溶解療法が治療の選択肢のひとつとなり得ると考えられた。

12 Conversion surgery 後早期に再発をきたした Stage IV 胃癌の 2 例

白井 賢司・河内 保之・田島 陽介
北見 智恵・川原聖佳子・牧野 成人
西村 淳・新国 恵也

長岡中央総合病院 外科

〔症例 1〕65 歳，男性。結腸間膜から後腹膜に広範に浸潤する 4 型胃癌。DCS が奏効したため胃全摘術を施行した。組織学的 CR であった。しかし術後 3 ヶ月で腹膜再発をきたした。

〔症例 2〕66 歳，女性。多発肝転移及び高度リンパ節転移を伴う 3 型胃癌。DCS 療法 7 コース，S-1 + DOC 療法 12 コース施行。肝転移は消失し胃切除を施行した。しかし術後 7 ヶ月で肝・卵巣・腹膜再発をきたした。

以上，Conversion surgery 後早期に再発をきたした Stage IV 胃癌の 2 例を経験した。Conversion surgery の有用性は多く報告されているが，その適応には議論の余地があると思われた。

13 神経内分泌腫瘍のリンパ節転移診断にオクトレオチドシンチグラムが有用であった 1 例

羽入 隆晃・石川 卓・小杉 伸一
市川 寛・坂本 薫・若井 俊文

新潟大学大学院 消化器・一般外科学分野

症例は 40 代，女性。2008 年，腹膜播種を伴う小腸神経内分泌腫瘍に対して小腸部分切除を行い，術後にオクトレオチド LAR の継続投与を行い長期間にわたり病状制御可能であった。初回手術より 4 年後の ^{111}In 標識オクトレオチドシンチグラムにて左頸部リンパ節に集積亢進を認め，腫瘍はわずかに増大傾向を示したため，左頸部リン

パ節郭清術を施行したところ神経内分泌腫瘍のリンパ節転移と診断された。現在オクトレオチドの投与を継続し，再発は認めていない。

神経内分泌腫瘍では高率にソマトスタチンレセプターの発現を認めることから，腫瘍の局在診断や転移診断に対して ^{111}In 標識オクトレオチドを用いたシンチグラムの有用性が示唆されている。

14 魚骨による消化管穿孔および限局性腸炎の 2 例

佐藤 優・小野 一之・岡本 春彦
田宮 洋一・阪 暁子*・野澤優次郎*
中村 厚夫*・八木 一芳*

県立吉田病院 外科
同 内科*

〔症例 1〕87 歳，女性。腹痛，発熱を主訴に入院した。CT で魚骨と思われる陰影と，膿瘍形成を認め，緊急手術を施行した。多発小腸憩室の 1 つにブリの骨が刺さり，穿通した腸間膜内に脂肪織炎を認めたため小腸部分切除を施行した。

〔症例 2〕79 歳，男性。左下腹部痛と発熱で内科入院。CT で S 状結腸に数本の魚骨と思われる陰影を認めた。病歴からは鯛の骨が原因と考えられた。ただ穿孔や膿瘍の所見はなく，炎症所見も軽度であり，保存的治療を行い，軽快退院となった。

魚骨の誤嚥による消化管穿孔・穿通は，腹膜炎や腹腔内膿瘍をきたし緊急手術を要することが多いが，症例 2 のように膿瘍形成がなく，炎症が軽度の症例においては保存的治療も選択肢として考慮すべきである。